OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロックの知覚論
Author(s)	塚崎, 智
Citation	哲学論叢. 1979, 5, p. 77-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66765
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロックの知覚論

塚崎智

一

ロックの用語法がしばしば一貫性を欠き、不安定さを示していることは、よく知られている。例えば、ロック哲学のキー・ワードとも言うべき「観念」(idea)という言葉も、その多義的な用法が多くの研究者によって指摘され、「ロックの観念の観念」(Locke's idea of idea)という題名の論文さえ書かれている有様である。ところで知覚(perception)という言葉の場合も、その例にもれず多義的に用いられていて、我々は「観念」(idea)としての perception、「作用」(action)としての perception、「能力」(faculty)としての perception と数え挙げることができるが、ここではごく大まかに、広義の「知覚」と狭義の「知覚」との二つの用法を認めることから始めたい。

広義の「知覚」というのは、ロックがデカルトから受けついだ考えである。それはロックが「知覚、換言すれば思考すること」(Perception, or Thinking)と言って、「知覚」を「思考すること」と同一視する場合の「知覚」であって、その「知覚」は「有意、換言すれば意志すること」(Volition, or Willing)と並べて「心の二つの大きな主要

活動」であると言われる。そしてこの知覚ないし思考の能力が、ロックの「知性」(understanding)なのである(Essay, II, vi, 2)[1]。「憶起」(remembrance)、「識別」(discerning)、「推理」(reasoning)、「判断」(judging)、「知識」(knowledge)、「所信」(faith)などが、知覚ないし思考活動の様態として認められるが(ibid.)、「感覚」(sensation)もまたその様態の一つに挙げられている(II, xix, 1)。

このような広義の「知覚」について、ロックは「知性の働きとされる知覚は三種類である」と言って分類を試みている(II, xxi, 5)。第一は、「我々の心のなかでの観念の知覚」、第二は、「記号の意味表示の知覚」、第三は、「我々の観念の間に存する結合・背馳、一致・不一致の知覚」。この三種類である。

ここでロックを離れてみても、perceptionという言葉は一般的には広くmental apprehensionというほどの意味で用いられるが、しかし他方、哲学において今日perceptionが問題にされるときには、sense perceptionという意味あいでのperceptionに限られるのが常態であると言えよう[2]。ロック自身も『人間知性論』第二巻・第九章「知覚について」の章で実際に「知覚」を論ずる際には、「知覚」を狭い意味にとり、sense perceptionとしてのperception、あるいはsensationの問題を扱っている。

そこではsense perceptionによる単純観念の受容が念頭におかれ、そのときの心が殆ど受動的な状態にあることが指摘される。「心は知覚することを避けることはできない」と言って、知覚時の心の不随意性(involuntariness)が述べられている。(また別のところでは、単純観念を心はただ受け取るだけであり、作り出すことはできないとも言われる、IV, iv, 4)。ロックは知覚に際しての心の受動性を終始強調するが、そのことはロックが知覚の因果説をとっていることと連関している。またこの心の受動性は、ロックが観念や知識の実在性を論ずる時に大きな役割を担わ

されることになるであろう。

ロックはこのように知覚時の心の受動性を強調しつつも、最小限の「注意」ないし「識別」の作用が必要なことを、付け加えることを忘れない。「身体にどのような変更が加えられようと、心に届かなければ、外の部分〔感覚器官――筆者注〕にどのような印銘がなされようと、内部で気づかれなければ、知覚が生じないことは確かである」(II, ix, 3)と言う。つまり、心ここにあらざれば、それ相当の外的な刺激があっても、音も聞こえないし、火傷の痛みを感じることもない、というわけである。勿論、痛みが激しい場合には、我々の注意を強要するが、その時にも注意のはたらきは存在している。感覚知覚(sense perception)はロックにとって、単なる身体的プロセスにつきるものでなく、心的なものなのである。ロックは特に視知覚に関して、しばしば感覚知覚が我々の習慣化した経験にもとづいて、無意識的に自動的な解釈ないし判断を受けること、そして我々は判断が作った観念を感覚の知覚と取ってしまうことが多いこと、更には、感覚の知覚は判断による観念を喚起するだけに役立って、感覚の知覚自身は殆ど気づかれないこと、を述べている(II, ix, 8～9)。例えば、多様な陰影をした平らな円の感覚の知覚は、一様な色をした凸面体を表象するものと判断される。習慣的判断が「見え(appearance)をその原因に変更する」(II, ix, 8)と言うのである。

二

ロックが知覚時の心の受動性を強調するのは、彼が知覚の因果説をとっていることと連関していることを先に述べたが、知覚の因果関係についてロックは次のように言う。すなわち、ある外的対象(観察可能な大きさの物体)から、単独では知覚できないある物体(別の箇所〔II, viii, 13〕では「感覚できない分子」ともいう)が感覚器官のところへ

送られてきて、感覚器官を変容(affect)する。その変容(affection — impression ともmotion ともいう)は神経あるいは動物精気によって脳へ伝えられる。この脳に伝えられた変容ないし運動が、外的対象について我々が持つ観念を、我々の心のなかに生む、と言うのである(II, viii, 12)。

この一連の過程においては、外的対象から外官・神経をへて脳活動にいたる過程と、脳活動から心的な表象である観念ないし知覚意識への変換の過程とが含まれている。この二つの過程を分けて考えようとする意識は、ロックに見られるところであり、例えばロックは、「これらの観念〔黄・白・熱い・冷たい・柔かい・硬い・苦い・甘いなど〕を感官が心へ伝えると私が言うとき、私が意味するのは、感官は外的対象から心へ、そうした知覚を心に生むものを伝えるということである、」と言っている(II, i, 3)。つまり、感官が心へ伝えるのは知覚ではなくて、知覚を生み出しうる何かだ、というのである。また別の箇所(II, i, 25)では、印銘(impression)と観念(idea)を区別して、心は印銘を受けとり、観念を知覚する、とも言っている。

ロックが前半の過程を因果的とみなすことは勿論であるが、後半の過程についてもやはり因果的なものとみなしているように思われる。脳活動が我々の心のなかに観念を生み出す(produce)と言う。この produce という言葉はかなり頻繁に用いられている。ただロックはデカルトの二元論を念頭におき、そのような production のあり方に問題を感じていたようであり、「我々が考えうるかぎりでは、物体はただ物体に当たり影響することができるだけであり、……運動が生み出しうるのは運動だけである。運動が快・苦や色や音の観念を生むことは我々の理解力を越える」と言って、そのような production を創造主の慈悲深い思し召しに帰している(IV, iii, 6)。同じ趣旨の発言はロックの遺作『マルブランシュの意見の検討』のなかにも見られるところであり、そこでは「光線によって網膜上に印銘が

捺されることは、理解できると私は考える。またそこから運動が脳へ伝えられることも考えうる。この運動が我々の心のなかに観念を生むことも信じるが、しかしその観念を生むのは私の理解を越える仕方においてである。神の善き思し召しに帰するほかなく、神の御はからいは我々の理解を越えている」と言う。[3]

ところでロックは『人間知性論』の冒頭近く(I, i, 2)自らの研究の意図を述べたところで、「今は心の物性的考察(physical consideration)に立入らない」と言っている。すなわち「心の本質はどこに存するかとか、動物精気のどのような運動あるいは身体のどのような変化で、我々は感官によって感覚を持つようになり、あるいは知性のうちに観念を持つようになるかとか、また観念はその形成されるにあたって物質に依存するかどうかとか、そうしたことの検討にわずらわされないであろう」と言う。しかしロックが知覚の問題を考え、更に第一性質・第二性質の問題を論ずるに当っては、物性的考察を援用しなければならなかったのであり、ロック自身そのことを認めていたと言えよう(cf. II, viii, 22)。

ロックがそのとき依拠したのは、ロックの年長の友人ロバート・ボイルの粒子説(ロックの言葉では corpuscularian hypothesis, IV, iii, 16)であった。すでにボイル自身、粒子説を知覚に関する有力な説明を提供するものと考えていた。[4] そしてこの粒子説において、さまざまな知覚現象がメカニカルに説明されたときに用いられた粒子の性質は、いわゆる第一性質であった。対象が我々の感官や他の対象に働きかけるのは、対象を構成している粒子や光の粒子の運動によって、我々の感官や他の対象の粒子のうちに変化を惹き起こすことによってである、と考えられる。そしてボイルの場合は、物質を微小部分に分割する化学的操作が我々に与える経験に照らして、大きさ、形状、運動(size, shape, motion)が粒子の三つの本質的性質(essential property)とされている。[5] ボイルは物体の表面の肌理(texture

――物体の表面あるいは表面近くの粒子のさまざまな配列による）の粗密の度合を変え、それに応じて表面の色が変化する様子を調べ、色の変化を粒子説をもって説明する。つまり、光の粒子が、物体の表面のさまざまなtextureによって反射されたり吸収されたりする仕方の違いによって、色の変化が説明できると考えた。ボイルは色・味・香のことを、less simple qualitiesと言っているが[6]、そのように単純ならざる性質を、より単純で普遍性を持つ第一性質によって説明することを試みたと言えよう。

第一性質・第二性質の区別を、ロックはボイルから受けついだと言われる。ロックは彼のいう粒子仮説を、物質の本性を明らかにする説としてのみならず、知覚の因果性を説明する説として受け入れたと考えられるが、第一性質・第二性質の区別も、そのような粒子仮説の本質的部分をなすものとして受けついだと思われる。『人間知性論』の第二巻・第八章において、ロックは第一性質・第二性質について集中的に論じているが、そこでは心のなかの観念と、物的対象のなかの性質との区別が強調される。「心が自分自身のうちに知覚するもの、換言すれば、知覚や思惟や知性の直接対象であるもの、これを私はideaと呼ぶ。そしてこの心に何かのideaを生む力を、この力が存する基体のqualityと呼ぶ」(II, viii, 8)と言う。そしてロックが当初意図した以上に「物性的考察」に深入りしてしまったのも、物的対象の「性質」と、この「性質」が心に生む「観念」との違いを判明ならしめるために必要だったからだ、と言うのである(II, viii, 22)。観念は第一性質の観念であれ、第二性質の観念であれ、すべて我々の心のうちにあり、他方性質について言えば、第一性質は物体（粗大なものであれ微小のものであれ）に本来的に具わっている性質であって我々のうちに第一性質の観念を生み出す力であり、第二性質は粒子の第一性質によって我々のうちに感覚の観念を生み出す力であるとされる。このような区別を設けることによって、例えば同じ水が同時に、一方の手で冷たいとい

う観念を生み、他方の手で温かいという観念を生むという知覚現象が解明できる、つまり、水を構成する粒子の運動と、左右それぞれの手を構成する粒子の運動を考え合わせることによって説明できる、とされた(II, viii, 21)。

三

ところで、しばしばロックの知覚表象説(the representative theory of perception)ということが言われる。近年ロックは知覚表象説をとっていないという見解も出されてはいるが(7)、先に述べたような性質と観念の区別、第一性質・第二性質の考えは、すでに知覚表象説の枠組のなかにあるとも考えられる。知覚表象説においては、我々の心のなかの私的な観念と、公共的な外的事物とが分けられる。我々が直接知覚しうるのは私的な観念に限られ、その観念は、我々の感覚器官、さらには脳へ働きかける外的事物によって因果的に生み出されたものである。そしてその私的な観念は、公共的で外的な事物を表象する(represent)。つまり両者の関係は、観念が外的事物のrepresentationないしsymbolizationであるとされる。

この表象説には、自駁性(self-refutation)といわれる困難があることが、しばしば指摘されてきた。すなわち、一方では我々が外的対象、感覚器官、神経、脳のような物的対象の働きを観察し知覚しうることを認めながら、他方においては我々が知覚しうるのは、私的で内的な表象である観念であるとされるからである。ロック自身、知覚表象説の含むそれに類する困難に気づいていて、それを次のように言い表わしている。「心は事物を直接に知らず、事物について心がもつ観念の介在によってのみ知ることは明白である。我々の知識は我々の観念と実在の事物との間に合致(conformity)がある限りにおいてのみ実在的(real)である。しかしここでの基準は何だろうか。心は、自分自身の観

念のほかに何も知覚しないとき、観念が事物そのものと一致すると、どのようにして知るのだろうか」(Ⅳ, iv, 3)[8]。

ロックはこのように問題を意識しつつ、結局のところ、知覚における因果関係に訴えることによって、その問題に解答を与えようとした。ロック研究家のヨルトンは、一致ないし合致(agreement or conformity)の関係は、少なくとも三つの異なった意味を持つと言う。すなわち、(1) resemblance (AがBに類似する) (2) caused by (AがBによって因果的に惹き起こされる) (3) standard or archetype (AがBの基準ないし原型) という三つの意味を持つと言っているが[9]、ロックが、すべての単純観念は事物と合致すると言うとき(Ⅳ, iv, 4)、(2)の caused byという因果的対応関係が念頭におかれていた。

ロックは「事物と一致すると確信してよい二種類の観念があると私は考える」と言う(Ⅳ, iv, 3)。第一は単純観念、第二は実体の複雑観念を除く複雑観念、とりわけ混合様態の観念が考えられているが、後者は観念自体が原型(archetype)である場合なので、今は措くとして、単純観念の場合のみを見ることにする。「単純観念は心が自分自身に決して作れないから、必然的に事物の所産、すなわち、心へ作用してそこに知覚を生む事物の所産でなければならない」(Ⅳ, iv, 4)とロックは言う。単純観念は心のなかに受動的に受容されるのであって、「我々の空想のフィクション」ではありえない。(ロックは real の対概念として fantastical を用いる)。そこで例えば、「心のなかの白さあるいは苦(にが)さの観念は、心にそれらの観念を生む或る物体のなかの力に正確に応じているので、観念が我々の外の事物と持ちうる、あるいは持つべき一切の実在的合致(all the real conformity)を持つ」(Ⅳ, iv, 4)と言うのである。

ここでは、観念のサークルのなかに閉じ込められた我々は、観念と観念のサークルの外にある事物とを比較するこ

とはできないのだから、観念のうちの或るものは事物に類似し、他のものは類似しないと、いかにして我々は言うことができるかが、問題とされたのではなかった。「類似」(resemblance)という意味での合致が問題とされたのではなかったと言えよう。ここでは、感覚的知覚による単純観念の受容に、因果的に対応する事物の存在を確信することが論ぜられた。この確信は殆ど「知識」(knowledge)の名に値すると言うが(IV, xi, 3)、この感覚的知識をロックは更に「共働理由」(concurrent reasons)を四つないし五つ挙げて固めようとする(IV, xi, 4~7)。

第一には、感覚知覚は想像(imagination)とは異なって感覚器官を必要とする。しかし感覚器官だけで観念を生むことはなく、従って知覚は感覚器官に働きかける外的原因によるとされなければならない。

第二には、感覚は我々に無理強いをするのであって、我々はそれを避けることができない。記憶や想像の観念と感覚の観念は、随意性・不随意性の点において異なり、現実の感覚は外的原因の存在を我々に確信させる。

第三には、或る種の感覚、例えば熱さの感覚は、苦痛を伴なって生み出される。単なる熱さの記憶が現実的な苦痛を伴なって生じることはない。この苦痛は、外的対象が我々の身体に当たるとき身体に生む乱れ(disorder)によって惹き起こされる、と考えられる。或る種の現実的感覚に随伴する快感についても、同様のことが言える。つまり、記憶の観念には伴なわないが、現実的感覚には伴なう快・苦の観念が、我々に外的対象の存在を知らせる。

第四には、我々の相異なる感覚の証言のあいだには多くの場合整合性(coherence)があり、外的事物の存在に関する相互の報告の正しさを証言する。私が紙の上に書いている文字の外的存在を、私は触覚ないし運動感覚や視覚によって知る。更にその文字が他人によって見られ読まれるとロックが言うとき(IV, xi, 7)、ロックは第五の理由として、他人の証言との合致をそこに加えていると言えよう。

四

ロックは感覚的知覚との因果的対応関係によって、外的事物の存在について確信を抱き、更に五つの「共働理由」、いわば傍証によって確信を固めようとした。しかし、因果的対応関係といっても、脳活動は知覚経験の必要条件であるのみならず、十分条件でもあることが、しばしば指摘されている。[10] 対象から脳までの因果過程が成立していなくても、脳活動（電気刺激、夢、幻覚等の場合）があれば、知覚経験が得られる。そうであれば、感覚器官は知覚経験の必要条件とは言えなくなる。例えば、目が損傷を受けた場合、脳は外的対象からの刺激を受けることができず、その対象によって惹き起こされるべき感覚を持つことを妨げられるであろう。目の損傷は、感覚の必要条件である脳活動を妨げる。しかし、目は視覚的感覚の必要条件ではない。脳活動が何か他の仕方で惹き起こされることによって、感覚が生じうるからである。

このように見てゆくと、外的事物の存在についての確信も、少なくともその確信の度合を弱めざるを得ない。またロックが「共働理由」として挙げた傍証についても問題がある。まず第一・第五の理由においては、感覚器官、他人の存在がそれぞれ前提されているが、このときのロックにとっては、それらの存在はまだ前提されているに過ぎず、確立されているわけではない。次に第二の感覚の不随意性について言えば、夢や幻覚も我々の意のままにならないことを考えれば、問題の決め手にはならないであろう。第三の苦痛や快感を伴なって生起するというのは、快・苦を伴なわず生起する多くの感覚のことを考えれば、適用範囲のごく限られた基準であると言わなければならない。更にまた、幻覚肢（phantom limbs）のような場合には、幻覚にも苦痛は伴ないうると言われている。最後に第四の理由について言えば、それが示すのは、ただ複数の感覚が合致することであり、あるいはせいぜい、一つの感覚が他の感覚によって

補なわれるということであり、外的原因の存在を確証するには至らないと言えよう。我々は夢のなかにおいても、我々が見る火に手で触れるということがあり、また我々が手で書くものを目で見るということがある。従ってロックの挙げる四つないし五つの共働理由は、あくまで傍証の域を出るものではないと言ってよい。[11]

ロックは知覚表象説のはらむ問題を意識し、それを感覚的知覚のもつ因果的対応関係をもとに解こうとしたが、問題はなお残されたと言わなければならない。

注

(1) John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, edited with an Introduction, Critical Apparatus, and glossary by Peter H. Nidditch. The Clarendon Edition of the Works of John Locke. (At the Clarendon Press, Oxford, 1975) 以下本書からの引用に際しては、書名を省略し、巻・章・節の番号のみを記した。大槻春彦氏の尊敬すべき邦訳『人間知性論』（岩波文庫、全四冊、一九七二～一九七七年）より多くの教示を受けた。

(2) cf. R. J. Hirst, *Perception and the External World* (Macmillan, 1965) p. 1.

(3) John Locke, *An Examination of P. Malebranche's Opinion of Seeing all Things in God*, Works Ed. 1823, Vol. 9, p. 217.

(4) ボイルに関しては、Peter Alexander, "Boyle and Locke on Primary and Secondary Qualities," *Ratio*, 16 (1974), reprinted in *Locke on Human Understanding*, ed. by I. C. Tipton (Oxford, 1977) を参照した。

(5) Robert Boyle, *The Origin of Forms and Qualities, according to the Corpuscular Philosophy*, 1666, The Works ed. by Thomas Birch (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1966) Vol. III, p. 16.

(6) *ibid.*

(7) 最近よく取り上げられるのは、A. D. Woozley, "Introduction" to his abridged edition of the *Essay* (London, 1964)

(8) ロックは同様のことを、彼の *An Examination of P. Malebranche's Opinion*, § 51 (Works Ed. 1823, Vol. 9, p. 250) に

おいて次のように述べている。「或る事物の似像(picture)が、その事物に似ているということを、私はその似像が表象している当のものを決して見ない場合に、どのようにして知りうるだろうか。」

(9) J. W. Yolton, *Locke and the Compass of Human Understanding* (Cambridge, 1970) p. 108.

(10) cf. R. J. Hirst, *The Problems of Perception* (London, 1959) p. 147.

(11) *op. cit.*, pp. 154—155.

参考文献（注記したものを除く）

D. J. O'Connor, John Locke (Penguin Books, 1952)

D. W. Hamlyn, Sensation and Perception (London, 1961)

C. B. Martin and D. M. Armstrong (eds.), Locke and Berkeley (London, 1968)

G. Buchdahl, Metaphysics and the Philosophy of Science (Oxford, 1969)

R. I. Aaron, John Locke (Oxford, 3rd edn. 1971)

J. L. Mackie, Problems from Locke (Oxford, 1976)

付記　本稿は関西哲学会第三十二回大会（一九七九年十月、於 金沢大学）での課題研究発表に若干加筆したものである。

（文学部助教授・倫理学）